
きみの足元で僕は

敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみの足元で僕は

【Nコード】

N7682B

【作者名】

敬

【あらすじ】

ひとりの若い男がひとりの女に出会いました。ほんの短い時間に、男が見たものとその身に起こった出来事にまつわる物語です。

ひと気のない薄暗いダンスフロアに僕は君を見つけた。

楽団はインチキでにぎやかな演奏を終えてステージを降り、それまでフロアを埋め尽くしていた人々が酒を求めてカウンターへ向かったり、静けさを求めて表の庭に行ったりと三々五々に散って行くのを、僕は中二階のバースペースに座り眺めていた。その日僕がそうしていたのには、特別に理由があつたわけではない。僕はただそうしていただけただけだった。

次の楽団の演奏までの間つなぎに音楽が流れるフロアで君はゆつくりと体を揺らしながら、きらきら光る銀色のサンダルのかかとを鳴らしていた。まるで楽団の演奏が終わってしまったことを抗議するかのように、口を尖らせ固くて冷たそうなモルタルの床をつまらなそうに踏み鳴らしていた。僕は君のサンダルを眺めた。そして君の足の爪が、サンダルと同じ銀色に塗られていることに気がついた。親指から小指まで、それぞれの大きさの小さな銀色が順番に並ぶ。

一番大きいのは親指。一番小さいのは小指。ただ小指ともなるともう僕のいるところからは銀色なのかどうかほとんど判別できないほどの大きさだった。ミラーボールのうろこが織り成す雪のような光が時たま君の足元を照らして、そのときに小さくきらりと光るのが君の足の小指の爪に違いなかった。それらは全て忠実な君の『しもべ』だ。その証拠に、いつまでも始まらない次の楽団の演奏にしばらくを切らしたのか、君が腰を大きくひと振りしてくると向きを変えると、君とその十の爪は一緒に僕の視界から消え去った。

誰もいなくなったダンスフロアに流れるのは陽気なソウルナンバーだった。雪のような光のひとつを目だけで追っていると目が回って僕は静かに目を閉じた。ジーンズのポケットに手をつ込み、その中のものに触れた。それは確かにそこにあつて、僕はこのものをどうしてやるうかと思いを巡らせた。目を回した僕の脳がその答え

を導きだすことができないでいるうちに次の楽団の演奏が始まった。華々しいスポットライトに照らされる彼等は輝いていた。さつき散って行った人々がぼつりぼつりとフロアへ舞い戻ってきた。いつの間にかフロアはたくさんの人で埋まっていた。

僕は生まれ変わったら音楽家になることに決めた。音楽家になってあのステージに立っている僕。ギターをかき鳴らす僕。輝いている僕、まばゆく煌めく僕。

まばたきをひとつするとさっきまでステージで輝いていたはず僕の姿は一瞬にして消え去り、その僕の代わりに見知らぬ彼等が格好良く曲を締めくくった。そして一言二言、気の利いたことを話して再び演奏を始めた。眩しすぎるステージからフロアに視線を移すと、薄明かりのもとで、笑顔を浮かべて手拍子をする人ーおい、あんた、あんたのその笑顔は本物なのか？つま先だけでリズムをとっている人ーおい、あんた、なんだってそんなに余裕なんだ？隣の女と何事かを囁き合い笑いながら腰を振る人ーおい、あんたたち、いったい何についてどういう意味で笑ってるんだ？

だけど僕は知っている。彼、彼女等は皆それぞれのやり方で今という時を楽しんでいる。皆が楽しんでいるというのに僕は、僕ときたらまるで…まるで、

「まるで」に続く最適な言葉が思い付きそうだったその瞬間に、君が再び僕の目の中に飛び込んできた。ほとんど下着みたいに見えるキャミソールを着ていたから、白い細い肩がむき出しになっていた。肩の一番先端に、小さな固そうな骨がうつすらと浮き上がっていた。僕は想像した。君の肩についた骨を口に含んだ僕を。僕はきつとドロップをなめるように君の肩の骨をなめるだろう。そして僕はその骨が君の体から離れず本物のドロップみたいに僕の口の中に収まらないことに苛つくだろう。

苛ついた感情が僕を支配し始めた。僕はすぐに、ひとりよがりの空想にすら苛ついた自分を恥ずかしく思った。君はそんな僕の空想などおかまいなしにステージの彼等に夢中だ。僕は何ともおもしろ

くなかった。そんな気持ちをごまかしたい一心で僕はまた自分の右手をジーンズのポケットに入れた。僕の指先がそれに触れても僕の苛立ちは全くもって収まることがなかった。

僕は手を止め、君を見た。もう僕はドロップの妄想に苛まされることはなく、そこにいる生身の、現実の君を見た。柔らかそうな栗色の巻き毛に、黒くて長い睫毛とキラキラ光る唇。そして真っ白い肌と、か細い足。僕は君に熱い視線を送り、君はステージ上の彼等に熱い視線を送る。そして君の視線の先にあるステージ上の彼等の視線はといえば、ついさっきまで忙しそうに閉じたり開いたりを繰り返した、出入り口に注がれていた。

彼等の視線は僕らのそれとは違った。戸惑ったような、少しだけ好奇の混じったような視線だった。そんな彼等の輝きは、さっきより少し失せていた。というより、彼等の演奏に対する集中力の半分ほどが出入り口に向けられていたために、彼等は自分たちが見られているということに無関心になってしまっているようだ。僕は彼等をそんなふうにしてしまったものが何なのかを知りたくて、彼等の視線を追った。

奴らだ…奴らに違いない！。

僕はピンときた。目つきだけが異常に鋭く、一人は玉虫色に光る布地のスーツを、もう一人は不格好なタテジマの布地のスーツを着ている。実に趣味の悪いスーツだ。そんな二人組は明らかにこの場に不釣り合いとしか言いようがなかった。僕は早速その二人組に『カナブン』と『シマ』というあだ名を与え、彼等を嗤った。まったく何てセンスのない奴らなんだ。僕の口から低くて短い笑いが洩れた。僕の笑い声が彼等の耳に届いたとしか思えないタイミングで、奴らが僕を見た。その視線は楽団の放つ爆音にも決して揺るがなかった。強くてまっすぐな視線。僕は一瞬射抜かれた子鹿のように動けなくなった。

でもそんなのは本当に一瞬だった。僕はすぐに勢いよく立ち上が

った。カナブンとシマは僕の動きにつられたように機敏にその身を階段に向かって移動させた。カナブンとシマの異常な動きに気付いたのは楽団の連中だけだった。楽団の意識はもう八割がた演奏になかった。彼等はもはや覚えたメロディを、覚えたりズムを、覚えた言葉を無意味に発する人形だった。

奴らから逃れるために僕は大胆な作戦に打って出ることにする。そう心に決めた瞬間、僕は目の前にある手すりを乗り越えると、中二階から君のいるダンスフロアにひらりと舞い降りた。まったく奴らに関わってはろくなことになるのだから――。

「キヤー」という黄色い声が楽団の演奏のテンポを狂わせた。僕が舞い降りた辺りには一瞬にして僕を中心にした円ができた。僕は今、輝いているだろうか？

僕はさっきまで自分がいた場所を素早く見上げた。カナブンとシマの血走った眼が僕を見ている。僕は出口までの距離を目で測った。出口まではほんの数メートル。僕の方に歩があるのは明らかだ。

君と話をしたかった。すれ違いざまにでもいいから君の声を聞きたかった。だけど今夜その欲望は果たせそうにない。また今度だ。残念だけど、今夜の僕ときたらまったくツキに見放されてしまっているようだ。奴らがこんなところまでやってくるとはね。

ぼやぼやしてなどいられない。僕は君の姿を確認することなく駆け出した。大股で二、三步進んで、僕の膝がガクンとなって、僕はつんのめって転んだ。後ろからバタバタと不細工な足音が近づいてくる。奴らの足音なのか？そうだ。僕はこんなところに転がっているわけにはいかないのだ。僕はもっと輝ける。そのためにも僕を奴らの好きにさせてはいけないのだ。

歯をくいしばって身を起こしかけたその視界に、銀色の十の爪を見つけた。きちんと並んだその爪は僕の視界で微動だにしなかった。僕はおそろおそろその爪から銀色のサンダルを、そして足の甲を、足首を、ふくらはぎを、膝を、ももを、腰を、胸を、首を、あごを、鼻を、目を、眉を、額を見た。

君だった。君が僕を見下ろしていた。君の目は黒く澄んでいた。ただただ深い黒がそこにあった。しかしその目は何も語ってはいなかった。驚きも怖れも、悲しみも何もなかった。ただ、美しく整った君の姿の中にひとつだけおかしな点がある。鼻血だ。どうしたんだい？ケンカでもしたのかい？転びでもしたのかい？

ドサドサツという音がして、僕の体はひどい重みに潰れた。僕はジーンズのポケットに素早く右手を突っ込んで、その中にあったものを放り出した。音らしい音も立てずにそれはモルタルの床を転がって、銀色の親指の爪の横に並んだ。君の十一個目の爪だ。

「尾崎修一！窃盗の罪で逮捕する！！」奴らの大きな声が静かなダンスフロアに響き渡った。

「尾崎！庭のせんでいに行った松村のばあさんのダイヤを盗んだのはお前だろっ？証拠は上がってんだよっ」

両手をひねり上げられ、カナブンだかシマだかが荒々しく叫んだ。冷たい鉄が僕の手首に食い込んだ。

そう、僕はケチな泥棒だった。

僕の前に回り込んだカナブンが、僕の髪を鷲掴みにして顔を起こした。カナブンの臭い息と下品に光る肩の向こうに君の黒い目が見えた。深い黒目の奥が笑った。君はサツと身を屈めて、十一個目の爪を拾い上げた。君と君のしもべなる十の爪はあつという間に向こうを向いて、銀色のサンダルのヒールとともに静かに遠ざかって行った。

いいぞ！それでこそ君だ！―僕は今日一番の幸福を味わった。心の底から笑いがこみ上げた。

笑う僕の横っ面をカナブンがぶん殴った。あごを激しく床に打ち付けた僕の口から、ポロリと一本の白い歯が転がり落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7682b/>

きみの足元で僕は

2010年10月28日05時35分発行